



撮影者：植村航大

(2022 年度第一回フォトコンテスト 準グランプリ)

1. 目次	1	5. 下田臨海実験所	18
2. 卷頭言：原 博隆 会長	2	6. 会計報告、学会参加補助	20
3. 職場便り	6	7. 編集後記	21
4. 研究室便り	17		

卷頭言

桜水会 会長

原 博隆

前任の故・橋ヶ迫会長、黒沢会長代行の後を受けて会長職を引き継ぎましたが、2年あまりという短い期間では会の全体像を十分に把握するには至らず、反省する日々です。頻繁に学校に足を運び、事務局をお願いしている先生方と意見交換を重ねる必要性を改めて痛感しております。

ご承知のとおり、コロナ禍は2019年末に始まり、2022年から2023年にかけてピークを迎えるました。現在も変異株の出現が続いており、依然として油断できない状況が続いています。リモートによる変則的な授業やさまざまな活動の制限も、昨年中頃から徐々に従来の学部活動に戻りつつあります。

桜水会の活動もコロナの影響により大きく様変わりし、事務局会議のリモート化によって在宅で議事に参加できるようになり便利になりましたが、一方で対面でなければ難しいことも残っております。運営方法については、今後あらためて見直していく必要があると感じています。昨年より、事務局長以下、事務局の先生方が数名交代されました。それにより、会としての運営にまだ不慣れな部分があり、ややぎこちないところも否めません。私自身、勉強のために他の分会の行事にお邪魔することもありますが、隣の芝が青く見えるのか、年間計画が着実に実行されている印象を受け、桜水会でもそのように整えたいと願っております。

現在、会と皆様との接点は主に会報のみとなっており、それも学部や学科の現況をお伝えする一方向の内容にとどまっています。

会報への寄稿は別のメールアドレス宛にお願いしているものの、会報そのものへのコメントや意見を簡単にいただく仕組みがなく、双方向の交流が十分とはいえない。オンラインの利点は、海外在住の方にも会報をご覧いただけること、そして意見交換がしやすくなる点です。今後は、気軽にコメントやご意見をいただける仕組みを整え、多くの方に参加していただき、より温かみのある会報を目指したいと考えております。同様に、オンライン総会についても、事前に開催の案内を行い、卒業生の皆さんと画面上で交流ができるような体制を整えることが、今後の課題です。スマートフォンやパソコンをお使いでない方にはご不便をおかけしてしまいますが、何卒ご容赦くださいますようお願い申し上げます。

学部校友会では、卒業生の皆さんに再び母校を訪れていただくことを目的に、「カミングホームデー」(同窓会)を設ける計画がありますが、現時点では学部からの正式な許可が下りておりません。せめて、10月最終週の土日に開催される学園祭の折には、ぜひご来校いただき、在校生との交流の機会としていただけましたら幸いです。

(第18期)



職場便り

共立製薬株式会社

森 美里

2022 年に博士後期課程を卒業した森美里と申します。経歴としましては、学部から博士後期課程を通じて水圈生物病理学研究室に所属し、間野先生、柴崎先生並びに難波先生にご指導を賜りました。現在は共立製薬株式会社で水産用ワクチンを主体とした水産用医薬品の開発に携わっております。

昨年度は間野先生と柴崎先生のお招きにより、新入生を対象とした講義で水産用ワクチンを中心に水産用医薬品の現状についてお話しする機会を頂きました。その中で、魚へのワクチン接種は一尾ずつの注射投与法が主流であり、現在市販されているワクチンでは対応が難しい魚病が多くあるといった課題が残されているということを申し上げました。これらの難問に興味を抱いて、果敢に挑もうとする方が仲間に加わっていただけたら嬉しく思います。お伝えした内容はかなり詰め込んだものとなってしまいましたが、少しでも在学生の皆さんの進路のイメージにお力添えができていたら幸いです。

当社では「動物と人の進む道を創る」というミッションを掲げ、ワクチンメーカーとして世の中に貢献できるよう努力しています。なかでも水産用ワクチンは国内シェアを 90% 以上占めていることから、社会的な責任も大きく、「共立さん、期待しているよ」と養殖業者さんから直接言われることも多々あります。間接的に国内の養殖産業の発展に貢献できる仕事であり、プレッシャーもさることながら、やりがいを非常に感じることができる職場です。また当社

には海洋生物学科の OB・OG が 5 名在籍しており、開発、製造、営業、薬事といった分野で活躍されています。このような環境は大変恵まれていると感じるとともに、「私も頑張らねば」と奮起する日々です。

水産用医薬品、特にワクチンの開発では、魚に対する知識は勿論のことながら、薬品についての理解、バクテリアやウイルスの培養方法・培養培地、増殖メカニズムや生産規模での培養方法についても知識や理解が必要であり、幅広い分野への興味や学習意欲が必要となります。現在、様々な魚病に対するワクチンが望まれますが、販売に至るまでの道のりは長く、険しいものです。一つの医薬品を創り上げるには膨大な知識・経験と、一人で取得するのは困難な量の実験データが必要であり、様々な方のご協力により販売することができています。自分自身の能力を向上させるとともに、当社内はもとより水産業に関わる様々な方々にご協力を頂きながら、今までにないワクチンや医薬品を開発できたらと思っております。

このように私が大好きな水産業界に貢献できる日々を過ごせているのは、学生時代に厳しくも愛情をもって接してくれた先生方、同期や後輩たちのおかげです。心より感謝申し上げます。水産業界に貢献



先輩とともに実験室で作業している様子

できるよう一層努力してまいりますので、今後ともご指導のほど何卒宜しくお願ひ致します。

(第 66 期)

株式会社科学飼料研究所

榛葉 溪介

この度桜水会会報の職場便り執筆機会を頂戴いたしました、榛葉と申します。在学中は水圈生物病理学研究室、通称『間野研』にてニジマスの病理について学んでおりました。2021 年に本学科を卒業し、現職は株式会社科学飼料研究所にて、養魚飼料の販売営業を拝命しております。

簡単に現職の説明を致しますと、科学飼料研究所は JA 全農グループの『各種飼料及び動物薬品の製造・販売メーカー』です。社名からして研究施設のような印象を持たれるかと思いますが、製造元としての色が濃いです。事業の柱としては 5 つあり、

『プレミックス(ビタミン等の微量原料を配合した飼料添加物)』、『人工乳・代用乳(牛豚の初期飼料、離乳食のようなイメージです)』、『原体加工(飼料等の原料を扱いやすく加工すること)』、『動物薬(消毒薬、ワクチン、抗生剤など)』、そして『養魚飼料』です。私はこのうち、『養魚飼料』の営業担当を行っております。養魚飼料とは読んで字のごとく、魚のエサです。この魚のエサを、主に養殖業者様へ提案、販売しております。弊社の販売先として最も多い魚種はニジマスやギンザケ等のマス類で、その他アユや錦鯉などの飼料も販売しております。

さて、この度本稿を執筆するきっかけとなったのは、昨年母校の講義『海洋生物学概論』に、僭越ながら登壇させていただい

たことです。その際は、私の学生時代の活動と、どのような経緯で現職に至ったのかをお話し致しました。概要を説明すると、私はもとより水族館飼育員を志して入学したものの、2 年目の学芸員受講中に受講申請を失念して失意の底に沈んだり、希望していた研究室が定員超過で入室できなかつたりと失敗が続くも、かねてからの夢であった水族館の飼育員にアルバイトとして勤めることが出来ました。その後インターンや卒業研究を通して改めて就職というものを考えたとき、水産業に関わり、なおかつ学んだ知識を生かしたいという思いが生まれ、最終的に水産飼料の製造、販売を行う科学飼料研究所に入社いたしました。失敗も多かったものの、多くを経験できたことから現職の選択肢に行き着くことができたと感じます。今回、母校の教壇で講義が行えたこと自体も私にとって非常に良い経験でしたし、私自身のこれまでを振り返るという意味でも有意義でした。

現職の話に戻りますと、現在私は各地の営業先へ飛び回りながら活動しております。日本の各地に魚の生産者がおり、その各々が矜持をもって魚を作っております。我々が出来ることはその魚を作る一助をし、なおかつ生産者の皆様に儲けてもらうことです。一筋縄ではいかないことも多いものの、大学で学んだ知識や私自身興味のある分野で生産者の方たちに貢献できるのは、大変やりがいがあると感じます。最近は大変ありがたいことに、研究室の後輩が続々と入社してくれております。私と同じように、水産に興味をもってこの業界に来てくれる方が多数いるのは嬉しい限りです。後輩たちにも、興味のある分野でやりがいを見つけつつ、楽しみながら働いてほしいと願っております。

最後に、私のこれまでを振り返ってみると様々な人たちとの御縁で溢れているように感じます。その縁は学生生活のみならず、インターン先やアルバイト、趣味等で知り合った方たちと多岐に広がります。様々な経験や失敗をしてきた道中で知り合えた方々とは、笑い、苦しみ、時には助けてもらつてきました。社会人となり友人と会う機会は昔に比べて少なくなつてしまつましたが、今後もその御縁をさらに広められるよう幅広い経験を積んでいきつつ、これまでの全ての御縁に、この場をお借りして感謝申し上げます。

(第 70 期)

特定非営利活動法人

Dream eggs ゆめたま

相川 健志

本学を卒業した後、私は 2 年間フリーターとして社会経験を積みました。その後、有限会社ヨネヤマプランテーションに就職し、アクアリウム担当として 6 年間勤務いたしました。サラリーマン生活を続ける中で、次第に「環境教育や自然とかかわる仕事がしたい」という思いが強くなつていきました。その思いを卒業論文をご指導頂いた神奈川県内水面試験場の主任研究員であった勝呂尚之氏（現・かながわ淡水魚復元協会会長）に相談したところ、「NPO がいいんじゃないかな？」という一言をいたしました。その言葉に背中を押されるかたちで、NPO 法人の設立を決意しました。こうして、2010 年 3 月に勤務先を退職し、「これで生きていく」と決意して、同年 4 月 2 日に「特定非営利活動法人 Dream eggs ゆめたま」を設立いたしました。しかし、NPO の活動だけで生計を立てるのは容易ではなく、2023 年には横浜市戸塚区に

ある青木産業株式会社（ガス会社）において環境部門を立ち上げ、企業内起業という形で新たな挑戦を始めました。現在は、NPO 法人、株式会社、そしてフリーの環境調査員という三つの立場で活動を続けております。

「ゆめたま」は、身近な自然の減少や外来種による生態系の破壊、高齢化による地域文化の衰退といった社会課題に対し、世代や立場を超えた交流によってその解決を目指すことを理念としています。これまでに、ホタルの保全、小学校での環境教育、河川の魚類相調査、横浜市内における国指定天然記念物ミヤコタナゴの保全など、さまざまな活動に取り組んできました。今後は、これまでの活動を土台に、次世代や地域住民に対して、ホタルとその生息環境の保全・復元、学校や地域でのビオトープの計画・造成・管理、さらには相模廻など地域文化の伝承にも取り組んでいきます。また、講習会やシンポジウムの開催、自然観察会や餅つき大会などの地域イベントの企画運営を通じて、情報発信や人材育成にも力を入れてまいります。

設立の経緯には、任意団体では行政や他機関との連携が難しいことや、個人での限界を感じたことが背景にありました。「ゆめたま」という名前には、誰もが持つ“夢の卵”を、共に育てていきたいという願いが込められています。

活動の柱は三つあります。一つ目は「地域生態系の保全と復元」で、トウキョウダルマガエルが生息する田んぼを、稻を最優先種とするビオトープとして管理しています。二つ目は「環境教育」で、観察会や稻作体験などの実体験を通じて自然との関わりを深めています。三つ目は「地域伝統文化の保存と伝承」で、横浜市泉区に伝わる地域文化「いずみ相模廻」の継承に取

り組んできました（現在は活動休止中です）。このほかにも、公園や他団体との連携による調査・観察会への協力、大学生インターンやボランティアの受け入れ、自主調査やイベント協力など、活動は多岐にわたります。

ゆめたまの活動の成果は、すぐに目に見えるものではありません。しかし「きっとかたちになる」と信じて、地道に活動を重ねています。本学の学生・卒業生との関わりも大きな支えとなっています。インターンシップや観察会などへのボランティア参加を通じて、多くの学生に助けられています。また、これまで関わってくださった卒業生の方々が SNS で近況を報告してくださったり、活動に足を運んでくださったりと、さまざまな形でつながりが続いています。なかでも、卒業生で漫画家・イラストレーターとして活躍されている安斎俊さんには、イラストや冊子、名刺の作成などをお願いしており、最近では仕事上の連携も生まれています。

これまでの活動を振り返ると、環境や地域文化に対する取り組みの一つひとつが、人と人、人と自然をつなぐ架け橋になってきたと感じます。学生時代のご縁をきっかけに始まったこの歩みは、決して順風満帆ではありませんでしたが、多くの方に支えられて今があります。これからも「夢の卵」を共に育てる仲間として、地域の中で、そして同窓の皆さんともつながりを深めながら、一歩一歩前に進んでいきたいと思っております。今後とも、変わらぬご支援・ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

（第 51 期）



池の水全部抜く（横浜市戸塚区谷矢部池2017.4.3）



研究室便り

海洋生物生理学研究室

桜水会会員の皆さん、お元気でしょうか。2023 年度末で朝比奈潔先生が退職され、澤山先生とふたりで研究室を運営してきた 2024 年度、無事にとは言えませんが、何とか終えることができました。研究室に所属していた学部生 17 名が卒業に漕ぎ着きました。また、宇野加奈子さんが『オニフジツボの繁殖生態の解明』、高橋翔君は『イルカ細胞の高塩分ストレスに対する応答と脂質利用に関する研究』、山崎陸真君が『鯨類の皮下脂肪と内臓脂肪の生理学的特徴に関する研究』、山本拓実君は『日本沿岸産カマイルカの集団構造および分化に関する研究』という課題でそれぞれ研究に励み、修士論文をまとめて博士前期課程を修了しました。おめでとうございます。

研究の指導をする立場として、私は、テーマは教員から与えられたとしても、研究の主体は学生であり、学生が知識も技術も自分のものとして身につけ、それらを使って自ら研究を進めるものだと考えています。その結果として、全然研究が進まない学生も出てきて困ったことになりました。2024 年度も停滞気味の学生がちらほらいました。

研究は、コストや時間のパフォーマンス、いわゆる“コスパ”や“タイプ”といった考えとは遠いところにある活動です。AI の進歩によって情報処理の速度が飛躍的に上がり、革新されている部分も多々ありますが、研究はひとつのことに執着し、いろいろ調べて多面的にそれを眺め、考え、試行錯誤しながら実験して、データが出たらまた考え、実験をやり直す、という繰り返

しの中でようやく成果が見えてくるという、基本的に「無駄の多い」知的作業です。先日、卒業生に会った際に、「卒論に取り組んでいた時間が贅沢で楽しいものだったと社会人になってから気づいた」と言ってもらえて嬉しかったのですが、そう、研究が楽しいものであることに社会に出てから気づく人が多いのです。それは、教員として研究の魅力を十分に伝えきれない私の力不足もあるのかもしれません、就職活動や、高い学費を補うためにアルバイトで学生が体力や気力を奪われたりすることも大きな要因だと思います。脳を働かすと多くのエネルギーを使うので、知的作業をすると想像以上に疲れます。また、研究の世界に慣れない学生たちは、知識を得て、それを整理し、考えをまとめていくのにかなり時間を要します。片手間では研究はできないのです。学部生で 1 年間、修士で 2 年間、研究をする時間がありますが、研究を楽しめるようになるには十分だとは言えません。それでも研究の愉しさに触れるためには、研究活動に重心をおき、就活はともかく、アルバイトは息抜き程度にするのが理想ですが、そもそも言っていられない事情があったりするのが辛いところです。アルバイトに明け暮れる学生は、かなり苦しい思いをしながら研究しているのだろうと思います。そんななか、今どきらしく“タイプ”と“コスパ”を重視する学生が、研究の成果発表日が近づいて焦り、ひたすら実験をして論文を読み、データをまとめる没頭の日々を経て、「研究が楽しくて、もっと続けたくなった」と言ってくれました。そういう学生が時々現れるのですが、そんな時に私は研究仲間ができたように感じます。大学教員の仕事は教育と研究ですが、ひとりでも多くの学生が研究仲間になってくれることを願いながら働いてい

ます。

2025 年度には、博士後期課程の学生が 4 名に増え、博士前期課程には 2 名、大学院研究生も新たに加わります。より活発な研究活動を展開できるよう、学生たちとともに励みます。桜水会会員の皆さんにおかれましても良い年度となりますようお祈りいたします。また、何かの折には、室内の配置がガラリと変わって明るさが増した（広さも増したように錯覚する）研究室に足をお運びください。

（鈴木）

海洋環境学研究室

卒業生の皆様には、時下、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

令和 6 年度の本研究室の構成は、荒 功一教授、小糸智子専任講師、大学院研究生 1 名、大学院博士前期課程 1 年次 1 名、4 年次学生 15 名でした。

これまで 14 年にわたり教育・研究ならびに当研究室の運営に携わってこられた小糸智子先生は今年度（令和 7 年 3 月末日）をもって退職されます。小糸先生は、2010

（平成 22）年に旧海洋生物資源科学科の助手として採用され、2014（平成 26）年に助教、2017（平成 29）年より専任講師をされておりました。小糸先生には、これからもお身体にご留意され、心機一転、新たな分野でご活躍されることを祈念しております。

荒教授は、2000 年 12 月より継続している『相模湾における沿岸生態系動態の解明（プロジェクト“SHONAM”）』を大学院生 1 名、学部 4 年次学生 7 名と共に実施し、同海域の物理・化学環境特性や各種プランクトン群集（ピコ・ナノ・マイクロ・メソサイズの全ての生物群）の生産性と栄養動

態などを精力的に調査研究しています

（2024 年 1 月～12 月に相模湾定期観測第 536～559 回目を実施）。6 月 2 日～7 日に 15th International Conference on Copepoda（第 15 回国際カイアシ類学会：日本で 2 回目）が広島国際会議場（広島市）で開催されました。同学会は、思い起こせば 34 年前、学生スタッフ（当時：修士課程 1 年）として大会運営のお手伝いをした 1990 年の第 4 回大会（会場：日本大学軽井沢研修所；大会実行委員長：門田定美先生）で相当な刺激とインスピレーションを受け、研究者になることを志すきっかけとなり（修士課程修了後に単身ブラジルへ渡り、現地に 7 年間滞在し、サンパウロ大学海洋研究所で 5 年間の博士課程を修了）、参加・研究発表ならびに研究者との交流を重ねることで一端の研究者に育ててもらった非常に思い入れのある大会です。今回、参加・研究発表ならびに研究者との交流でき、また運営委員として同大会に関われる機会を得たことは、この上ない喜びでした。

小糸専任講師は昨年度に引き続き、多毛類を対象としてマイクロプラスチックを取り込んだあとの体内での挙動などを調べました。最近、ヒトの脳からプラスチックスプーン 1 本分のマイクロプラスチックが検出されたという、センセーショナルな研究結果が発表されました。地球上で暮らす以上、いかなる生物もマイクロプラスチック曝露は避けられないことを思い知らされる今日この頃です。マイクロプラスチック以外のテーマとして、深海性二枚貝類、浅海性多毛類の元素分析、深海性多毛類の系統分類や組織観察などを行ないました。

さて、小糸は今年度末で退職するため、分担執筆してきた研究室だよりは本稿が最後となります。これまで深海および浅海の無脊椎動物を対象とした研究に取り組

んでくれた学生諸子に深く感謝申し上げます。また、皆さんの幸せを心より願っております。そして、水産学科の頃から連綿と紡がれてきた桜水会の今後益々のご発展を祈念いたしております。

今年度の本学科海洋生物資源応用コース (JABEE 対応コース) の技術者教育の一環である特別講義 (3 年次、前期) では、6 月 22 日 (水) に樋 慎一郎氏 [第 47 期、(株) いであ] が『科学技術者最高位の国家資格『技術士』～合格に至るまでのプロセス～』、7 月 3 日 (水) に中瀬浩太氏 [第 31 期、五洋建設 (株)] が『企業内での技術士の役割 (異業種内での経験)』、7 月 10 日 (水) に市橋 理氏 [第 37 期、アジア航測 (株)] が『環境コンサルタントの仕事～自然と災害～』という標題で講義しました。

来 (令和 7 年) 度は、上記の教員 (荒) 1 名、大学院研究生 1 名、大学院生 1 名、4 年次学生 11 名の構成となります。

卒業生の皆様が湘南 (藤沢) キャンパスの近くへお立ち寄りの際には、是非とも海洋環境学研究室にお越し頂き、後輩達を叱咤激励して頂きますよう宜しくお願ひ申し上げます。

(荒・小糸)



増殖環境学研究室

2024 年度の増殖環境学研究室は、教員 2 名 (糸井、周防)、大学院研究生 1 名大学院生 (修士課程) 7 名、学部 4 年生 18 名、合計 28 名で活動しました。今年度は、海洋生物資源科学科が海洋生物学科に名称変更して 2 年目に入り、教員は新たな座学を行なながら、研究・教育活動に取り組むこととなりました。7 月には 2023 年 9 月より産休・育休に入っていた周防先生が復職しました。

研究活動では、当研究室で取り組んでいるフグ毒に関する研究テーマを遂行するため、4 月からフグ毒保有生物の採取に取り掛かりました。前年同様 5 月の連休明けには、例年よりも早期に江の島でクサフグの集団産卵が始まり、試料採取を行いました。確実に温暖化が進行していることを実感させられました。6 月中旬から末にかけて、長崎大学の練習船・長崎丸での調査航海に参加しました。長崎を出港し、沖縄本島、西表島、石垣島でフグ毒保有生物を採取しました。7 月には新潟海洋高校での実験、三陸や下関での試料採取を行い、その後も年明けの 2 月まで全国各地を飛び回りました。サンプリングや飼育実験から戻るとその試料の分析に取り組み、9 月には千葉県で開催されたマリンバイオテクノロジー学会若手の会の合宿に参加、10 月には学生実験や東京海洋大学大泉ステーションでの実習を行うなど、研究室の教員・大学院生・学部生は息をつく暇もなく活動していました。

今年度も学会発表等は精力的に行いました。5 月に茨城県つくば市で開催された第 24 回マリンバイオテクノロジー学会大会、9 月に京都市で開催された令和 6 年度日本水産学会秋季大会など、学会・シンポ

ジウム等で教員、大学院生、学部生が研究発表を行いました。マリンバイオテクノロジー学会では、大学院修士2年生の白井響子さんが優秀ポスター発表賞を受賞しました。



マリンバイオテクノロジー学会の会場となった筑波大学で、優秀ポスター発表賞の賞状を手に記念撮影。

11月28日には、京都のサントリーワールドセンターにて開催された生有研シンポジウム2024で、大学院修士2年生の木原聖人君がBest Discussion賞を受賞しました。



生有研シンポジウム2024の表彰式での様子。

大学院生および4年生の取り組みにより得られた研究成果は、Marine Biotechnology誌等の国際誌に掲載され、世界へ向けて公表されています。東京大学大学院水圈生物工学研究室の浅川修一教授との共同研究の成果をMarine Biotechnology誌に公表した論文で使用した写真が、2025年の同誌の表紙に使われることになりました。この論文の筆頭著者は、本学卒業後に東京大学大学院に進学した稻橋京史郎君です。



2025年のMarine Biotechnology誌の表紙。

これらの成果は、卒業研究発表会や修士論文発表会でも披露されました。卒論発表会後に行われた塚本賞では、当研究室の金子結唯さんが1位に選出されました。



塚本賞での金子さんのプレゼンの様子。

このほか、海洋生物資源科学実習 II の一環として、下田臨海実験所での実習を 7 月に行いました。また、10 月末には東京海洋大学大泉ステーションにおいて、三井先生、佐久間先生にご指導をいただき、ニジマスの採卵実習を行いました。どちらも、とても実りある実習になったと思います。忙しい中でも実習や研究活動に取り組み、学生の皆さんには大きく成長することができたのではないかと思います。

2024 年 3 月まで社会人博士の学生として、4 月から大学院研究生として在籍していた上田紘之君が、11 月 11 日、無事に博士（生物資源）の学位を授与されました。今後の活躍をお祈りします。

2025 年 3 月 25 日、桜の開花と同時に、増殖環境学研究室所属では、4 年生 18 名（うち 2 名は本学大学院、4 名は他大学の大学院に進学）、大学院修士 2 年生 3 名が新天地に向かって飛び立ちました。皆さんの今後の活躍を期待しています。

（糸井）

海洋生物資源利用学研究室

2 月 10 日（月）に開催された卒業研究発表会が無事終了し、4 年生から 3 年生への実験引継ぎも済み、年度納めの雰囲気が研究室にも漂っています。例年この時期は、

「三寒四温ですね」といった季節の話題に触れることが多いのですが、今年は花粉と黄砂の影響でアレルギー症状が非常に強く、なかなか過酷な状況となっております。今年度を振り返ってみると、大学院生 3 名（1 名は、水産技術研究所（横浜）で研究を実施）を迎える研究室活動がスタートしました。4 年生は入学当初はコロナの影響でオンデマンド授業も多かったと思いますが、学年が上がるにつれそれも解消し、今年度は通常の授業形態でした。

実習では、6 月に 3、4 年生合同で国立科学博物館に伺いました（昨年は虫干しで休館だったため 2 年越しの訪問です）、12 月に昨年と同様に 4 年生がキリンビール工場見学を実施しました。また、研究室で行う卒業研究や演習・実習なども予定通りに実施することができ、食品加工実習は夏季にポークソーセージ、冬季にサバ水煮缶詰を製造しました。また、3 年生の科目にある学外研修/インターンシップも、鈴廣かまぼこ（株）（恵水工場、F P L 実習、風祭店）、国立研究開発法人水産研究・教育機構水産技術研究所衛生管理グループにて実施させていただきました。今年の参加者は、鈴廣かまぼこ（株）が 11 名、水産技術研究所が 4 名でした。鈴廣かまぼこには、当研究室の 3 年生に加え大学院生や他研究室の学生も参加させていただき、製造や開発、販売に至る幅広い企業の側面を経験させ



ていただきました。また、水産技術研究所では、前期に特別講義で沼野聰研究員に研究所のご説明をいただいたことに加え、研修では高額機器を用いた分析や各種衛生学実験を実施していただき、両機関には大変感謝申し上げます。

令和6年度の研究室所属学生は大学院修士課程3名、4年次学生16名でした。卒業論文発表会後の2月14日（金）に大講堂にて開催された塚本賞には、研究室の代表として、遠藤優樹君が「数種魚類における寒天分解酵素の探索」、高橋康平君が「乾燥卵白粉末添加によるイカ肉加熱ゲル物性への影響」を発表し、研究室の研究内容の一端を他研究室の同級生や下級生に紹介してくれました。卒業研究を通じて、16人全員が成長してくれたのを実感しました。今年度は大学院に内部進学する学生が4名おり、就職する学生が11名、公務員希望の学生1名になります。それぞれの新たな進路でのご活躍を祈念しています。

令和7年度は、大学院修士課程1年生4名、2年生3名、4年次学生16名、松宮政弘特任教授、福島の体制でスタート予定です。新4年次学生は例年通り、先輩の2回の中間報告会や卒業研究発表会に参加するなどして、一年かけて研究室のテーマを勉強してもらいました。卒業研究発表会後に各自が令和7年度より開始する卒業研究テーマの分野を決め、学生実験（2年次：水産利用学実験）の担当実験も含めて、先輩から引継いでいます。3月1日に就職活動が解禁となり、本格的に活動がスタートしました。例年に比べ就活の進行が早くなっていることですが、焦らず自分の適性を見極めて将来を決めてもらえたたらと思います。大学院に進学する4名は、今秋の学会発表を目標に意欲的に実験を進めています。

学部改組から3年目に入り、新年度は4年生が「海洋生物資源科学科」、1、2、3年生が「海洋生物学科」の新旧入り乱れた状態になります。私は4年次生の担任を務めておりますが、最後の「海洋生物資源科学科」生をしっかりと見届けたいと思います。両学科の学部校友会分会である桜水会の様々なサポートに感謝しております。卒業生の皆様方においては、学部祭や日大マルシェ（R6年度より開始：近隣の方は是非お越しください）などでキャンパスに足を運ばれた際には、研究室にもお立ち寄り下さい。お会いできるのを楽しみにしております。

（福島）

魚群行動計測学研究室

寒暖の差の激しい春の日が続く中、研究室に在籍した大学院生2名、4年生19名が3月25日をもって無事に修了および卒業しました。取り組んだ研究を精一杯やり遂げ、あるいは辛うじて終わらせて卒業式に臨んだ顔は皆、晴れやかで満足感に満ちたものでした。大学院生2名はともに学会での発表を2回行うなど、積極的に研究を展開し、学部生の研究を常にリードしてくれました。4年生は北海道、秋田県の他、下田臨海実験所などのフィールドに出掛けて実験を行った他、研究室内での実験を行った者も日々、コツコツと実験に取り組みました。1年間の研究室での生活では、良い想い出も苦い経験も含めた様々な感想があることと思います。研究過程で得たテクニックや考え方が、今後の仕事・生活の意外な場面で役立つことがあるかもしれません。何はともあれ、研究室あるいは在学中の出来事が懐かしく想い出される時が来るでしょう。研究室では、2年生向け集中学生実験補助を始めとして、下田臨

海実験所などでの実習補助などを通じて研究室活動にも大いに貢献してくれましたし、彼らの助力無しに研究室の運営は行えませんでした。一方で教員は、時代とともに変化していく学生気質に追い付き、対応するのに苦労しながらの毎日もありました。

大学院生および学部生は、研究生として残る1名を除いた全員が、無事に就職が決定しました。近年の求職活動は好調が継続しており、大半の学生が複数の内定先を得た後、希望する企業・団体を早期に選んで決定しました。歴代の卒業生が多方面で活躍され、業界において高い評価を得ておられることが、このような好結果につながっているものと思われます。無事に希望する会社に就職を果たした学生も、入社後は日々研鑽を忘れることなく成長し、会社あるいは社会で活躍されることを期待しています。とともに、健康には十分留意され、幸せな生活を送られることを教員一同、心より祈念しております。

当研究室の前身となる漁業生産学研究室で助手を務めておられた、長谷川英一先生が昨年お亡くなりになられた(享年72歳)との報せをいただきました。先生は日本大学農獸医学部水産学科から三重大学生物資源学部に転出された後、水産庁水産工学研究所、同さけます資源管理センター、同北海道区水産研究所でご勤務され、主として魚類の視覚と行動に関する研究を展開されて来られました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(小島)

水族生態学研究室

令和6年度における水族生態学研究室の所属学生数は、大学院生4名、学部4年生

18名、学部3年生19名の合計41名でした。このうち海洋生物学科所属の高井と藤井先生が指導していた学生は、大学院生4名、4年生14名、3年生15名の合計33名でした。動物学科所属の中井先生は動物学科のカリキュラムとスケジュールに沿って活動されているため、中井先生の指導学生8名(4年生4名、3年生4名)は別個の単位で研究室活動に従事していました。現在はカリキュラム改正に伴う学部再編のまっただ中にあります。このような時期ではありましたが、多くの学生達がしっかりと修士研究・卒業研究に取り組んでくれました。



卒論発表会を終えて。

皆、つつがなく成果を発表してくれました。

海洋生物学科側の卒業研究では、海水魚のメジナ類とユメカサゴ、淡水魚のアユ、コクチバス、タモロコ、カダヤシ、グッピー、ミナミメダカ、ニホンウナギ、カメ類のカミツキガメとアオウミガメ、無脊椎動物のキンセンガニ、ヤドカリ共生イソギンチャク、および造礁性サンゴ類のクシハダミドリイシ種群が研究対象となっておりました。ようやくコロナ禍が収束し、今年度の4年生達は特段の制限を受けることなく卒業研究に取り組むことができました。最終的に様々な生物について多くの興味深い研究成果が得られており、大変充実した一年であったと感じております。

大学院生では、博士前期課程2年次の池西優希君と岡村潮君が修士論文を提出し

ました。池西君は「カミツキガメの摂餌生態が魚病細菌の拡散に及ぼす影響の検討」という題目で修士論文を執筆しました。カミツキガメの摂餌生態と魚病細菌エドワジエラ・イクタルリの関係について興味深い成果を発表してくれました。岡村君は「五島列島近海におけるムツ属魚類の出現種組成および食性」という題目で修士論文を執筆しました。五島列島近海におけるムツ、クロムツ、およびムツ属未記載種の出現状況とムツの餌生物について示唆に富む成果を発表してくれました。二人とも、大学院までの6年間で学んだ知識を活かし、社会人として活躍してもらいたいと願っています。博士前期課程1年次の執行龍之介君と鈴木武秀君は、それぞれメジナ属魚類の繁殖と食性に関する研究と千葉県印旛沼流域におけるカミツキガメの食性に関する研究に取り組んでいます。一年後の修士論文発表会で充実した発表ができるよう頑張ってもらいたいと思います。



下田臨海実験所にて。

今年も伊豆で研究室実習を行いました。

最後になりますが、本年度も釣りやフィールド活動が大好きな人が多く、研究室の雰囲気は一年間を通して賑やかで良好でした。次年度からは環境コンサルタント会社で働いている研究室OBの高橋弘地君（令和5年度博士前期課程修了）が博士後期課程の大学院生として研究室に戻ってくることが決まっております。社会人としての経験を活かして大学院生や学部生の

後輩達を引っ張っていってくれることを期待しております。次年度も学生達に充実した一年を過ごしてもらえるよう尽力したいと思いますので、変わらずご支援頂けますよう謹んでお願い申し上げます。



卒業の日。

前途に幸多からんことを願っています。

（高井）

生物機能化学研究室

挑戦と発見の10年 旅立つ学生たちへ贈る言葉

生物の世界では、捕食者と被食者が互いに進化しながら命をつないでいく。この関係を「捕食者-被食者相互作用」と呼ぶ。特に被食者は、いつ捕食されるか分からぬため、捕食者を検知する巧妙なシステムを持っている。

私が研究しているエゾアカガエル (*R. prica*) の幼生、いわゆるオタマジャクシとヤゴの関係は、まさにこの相互作用の典型例だ。ヤゴは沼地の食物連鎖の頂点に君臨する最強の捕食者。一方、オタマジャクシは、誰もが知る食物連鎖の最底辺。哀れなことに、彼らは常に誰かに狙われている。しかし、だからこそ彼らは進化してきた。ヤゴの気配を察知すると、オタマジャクシは匂いを頼りにその存在を感じ取り、行動を抑制するのだ。まるで、人間が危険を察知して無駄な行動を控えるように。

この研究に着手したのは 2014 年。当時 4 年生だった戸田君が、基礎的な実験を積み重ね、研究の礎を築いてくれた。ヤゴの捕獲も研究室のみんなで行った。大量のヤゴから放出される化学物質を集め、それを分離・同定するという研究を、毎年 1 人ずつ受け継ぎながら続けてきた。だが、いつも良いところで研究は止まる。分離した化学成分の中に、オタマジャクシの行動を抑制する成分があると、彼らはピタリと動かなくなる。この行動抑制成分を特定するため、気の遠くなるような実験が始まった。

ところが、どういうわけか実験中にオタマジャクシが死んでしまう。ストレスで弱り、最後には命を落としてしまうのだ。昨年、この研究を引き継いでくれたのが、小さな熊のような風貌の大山君。修士の高城君とタッグを組み、オタマジャクシやヤゴの飼育、オタマジャクシの行動実験に心血を注いでくれた。彼らは測定セルを自作し、夜を徹して実験を行った。

ようやく進展が見えてきた矢先、ある日、大山君から電話が入る。

「先生！ どのサンプルもオタマジャクシが動きません！」

「なんで？ 突然？」

嫌な予感がした。急いで実験棟へ駆けつけると、寒さが染みる実験室の片隅で、大山君と高城君が暗い顔をしていた。

「どうしたんだ？」

「コントロールのオタマジャクシまで動かないんです！」

検証の結果、実験に使うセルのプラスチ

ックと接着剤から可塑剤が溶け出していた可能性が浮上。そこで、すべてのセルを熱水処理し、10 日間にわたり徹底的に洗浄した。

「これで大丈夫だ！」と思った矢先、また大山君から連絡。

「先生、今度はとても元気よく動いていたオタマジャクシをセルに入れた途端、ピクリとも動かなくなります」

それは閉所恐怖症かも？ オタマジャクシのサイズが大きくなり、セルが狭すぎたのかもしれない。セルのサイズを変更すると、再び元気に動き出した。

そんなことを繰り返す中、ある日またしても異変が。

「先生！ 今度はタンクごとオタマジャクシが動きません！」

調査を進めると、原因が判明。実験を早く行い為にチャンバーで 4°C に保管していたオタマジャクシを、急に 20°C の水に入れたことでショックを受けていたのだ。

「それなら君たち、今度-20°C の冷凍庫に 60 分間入ってから 43°C の温泉に飛び込んでみるか？」

生き物の視点で考えること、それが研究の基本だ。

さらに追い打ちをかけるように、オタマジャクシが次々と死に始めた。調査を続けると、恐怖ストレスにより弱った個体が寄生虫に侵され、命を落としていたことが判明。地獄のような戦いを経て、ようやく強い行動抑制を引き起こす成分の精製に成

功した。この成果は、東京海洋大学の永井教授との共同研究により、ついに物質の同定へと結びついた。

しかし、研究の本質は単なるデータの積み重ねではない。どこまで実験対象の生き物と向き合えるか、どこまで彼らの視点で考えられるか。それこそが、科学の根幹だ。そして、どんな単純な作業も、完璧に成し遂げることは容易ではない。

「初めは本当かな？と半信半疑だったけど、何度も実験を繰り返し、統計解析を行ううちに、これは真実だと分かってきました。」

これは、大山君と高城君が語った言葉だ。

決して華やかな研究ではなかった。むしろ苦しく、泥臭い戦いだった。しかし、君たちが最後までやり遂げたこの経験は、君たちの一生の財産となるだろう。

二人とも、卒業おめでとう。

そして、この10年間、この研究に携わってくれたすべての卒業生へ。

一緒にサイエンスを通じて私と遊んでくれて、本当にありがとう！

（森）

水圏生物病理学研究室

令和6年度の水圏生物病理学研究室は、教員2名、学部学生18名、修士学生6名、コラボレーター2名の28名で活動しました。

学生の就職状況をみると、今年も堅調で、飼料会社が最も多く、次いで水族館、製薬、水産食品、公務員、電力の会社等に就職が決まりました。今年は、修士課程2年の片野君が水産庁の総合職として採用されるなど、ここ数年、水産系の

公務員を目指す学生が増えてています。養殖に関わる魚病を研究していると、養殖生産者と密にコミュニケーションを取り、サポートしている水産試験場等の公的機関の重要性を実感することが多々あります。現在も複数の公的機関と共同研究を行っており、今後も水産・養殖産業を支える公務員の世界も目指してもらえたと想います。

研究室の活動としては、本年度は本学部の実習施設である下田臨海実験所や水上実習所を使って宿泊実習を行いました。密な人間関係を得意としない学生が増えてきているのは事実ですが、大学や研究室の生活を通して学生ならではの経験を積み、一生の友人を得てほしいと思います。昨年に続き、海外との交流も進めることができ、カンボジア国から2名の研修生を受け入れ、約1ヶ月間にわたる魚病実習を実施しました。また、複数名の修士課程の学生が、デンマークで開催されたAQUA2024や、武漢や上海で開催された二国間交流事業に参加して発表を行いました。最近、海外に行きたがらない

（海外に興味がない）学生が増えているといわれていますが、残念ながら水産分野をみても我が国は世界のトップランナーではなくなりました。養殖産業などは世界では右肩上がりで発展していますが、国内は伸び悩んでいます。国内だけみても、難しい時代。研究室が海外への門戸・交流の場となるよう努めています。

今年度は、コロナが一段落して多くの仕事が入るようになり、学内外の仕事を回しきれなかった点が個人的には反省点となりましたが、柴崎先生や院生・学生達の奮闘により多くの研究成果を得ることができました。柴崎先生は科学技術振興機構（JST）の創発的研究支援事業の研

究者に選ばれ、複数の大型研究プロジェクトを進めることになりました。詳細は柴崎先生に筆を譲りますが、今後の発展が今から楽しみです。 (間野)

令和6年度は、これまでの研究人生において大きな出来事があった年となりました。

一つ目は、日本科学技術振興機構（JST）の創発的研究支援事業という大型研究費に採択されたことです。学生たちが取り組んでくれた研究の成果を基に研究を立案し、おかげさまで採択されました。令和6年度は、農学分野から16名の若手研究者が選出されましたが、私立大学所属として唯一の採択者となりました。また、日本大学としても史上初の採択となり、学部や大学も応援をしてくれています。この研究助成は、学位取得後15年以内の研究者を対象とし、7~10年間にわたって支援が行われるもので、特筆すべき特徴として、責任指導する博士課程の学生には、文部科学省から給与が支給される仕組みが整えられています。金銭的理由で進学をためらう学生の支えになればと願っています。

二つ目は、学術振興会主催のHOPEミーティングでの講演および座長の経験です。HOPEミーティングは、世界中から集まった若手研究者と多数のノーベル賞受

賞者が議論を交わす国際会議です。私自身も大学院生の頃に参加者としてこの会議に参加し、大きな刺激を受けました。当時印象的だった受賞者たちの言葉や考え方、現在も講義中に紹介しています。今回、過去の参加者代表としてお声がけをいただき、セッションの座長と、これまでのキャリアについて講演を行う機会を得ました。

さらに、昨年に引き続き、福井県立大学および中国科学院水生生物研究所との共同プロジェクトである二国間交流事業も実施しました。夏季には、間野先生にご引率いただき、2名の大学院生が中国を訪問して発表を行いました。なお、私は、昨年度の交流会で体験した熱烈な歓迎（中国式の乾杯の儀式）と、夏の武漢の厳しい暑さに圧倒された経験から、今年は日本で留守番することにしました。冬季には、中国から10名ほどの研究者・大学院生が本学を訪れ、研究セミナーや交流会を通じて交流を深めました。大学院生のみならず、学部生たちも英語での研究交流に挑戦しました。

おかげさまで、修士・博士課程への進学を希望する学生も増えつつあります。学部生たちも卒業論文研究や研究室生活を満喫してくれているようで、今後も活気ある研究室づくりに貢献できればと願っています。 (柴崎)



下田臨海実験所

下田臨海実験所での実験・実習は、海洋生物学科の1年次全員が4班に分かれて2泊3日の日程で実施する海洋基礎実習Ⅰの他、2年次の小型船舶操縦法実習（5班：1泊2日）、3年次に各研究室で行われる海洋生物資源科学実習Ⅰの他、4年次の卒業研究および海洋生物資源科学実習Ⅱおよび同演習Ⅱでの利用が主となっており、年間延べ800人超の宿泊利用があります。今年度は、地元須崎地区財産区に費用を拠出いただいた実験所海側斜面の崖崩れの修復工事が完成した他、実習時に出す手漕ぎボートの揚収用のスロープの撤去および新設と、錆が生じ始めていた桟橋天板の付け替え工事が行われました。また各種の実習機材を保管していた倉庫群は、老朽化した3棟を取り壊し、比較的新しい2棟を残して機材はここに集約しました。新年度からは、長らく使用が禁止されていた簡易宿泊棟も利用が再開されることとなり、ようやく以前の利用形態に戻りつつあります。実験所の宿泊棟は教職員の保養としての利

用も再開されることになり、利用者は今後、更に増えることと思われます。施設は年月とともに老朽化し、これを更新・整備しながらやっていますが、きれいな海に囲まれた素晴らしい環境であることには変わりありませんので、新たに迎える新入生が実験所に来て良かった、また来たい、と思えるような施設であり続けるよう尽力したいと思います。

最後になりましたが、長らく地元須崎財産区の区長を務められ、崖崩れ修復工事費用の地元による全額負担を決断された土屋磯雄氏が、昨年のこの原稿を書いた後、逝去されました。さらに、小型船舶操縦法実習の実施および、本学実習船すざき2世の保管・管理で長年お世話になっている、株下田ボートサービスの伊藤秀利氏も、昨秋お亡くなりになりました。ご両名のご冥福を心よりお祈り申し上げるとともに、本学教育に対するこれまでのご協力とご厚情に対して厚く御礼申し上げたいと思います。

（臨海実験所長 小島 隆人）



会計報告

令和6年度日本大学桜水会の収支決算は以下の通りですので、ご報告致します。

会計担当 周防 玲

令和6年度 日本大学桜水会決算報告書

1. 収入の部

項目	予算額	決算額	摘要
準会員年会費	1,710,000	1,560,000	
縁越金	9,686,072	9,686,072	
雑収入	0	0	
利息	300	4,994	
その他	0	0	
合計	11,396,372	11,251,066	

2. 支出の部

項目	予算額	決算額	摘要
通信連絡費	500,000	0	ハガキ印刷、発送費用
会報・総会案内発送	490,000	0	
通信費	10,000	0	
事業費	2,000,000	1,597,251	
会報発行	0	0	
準会員対策費	800,000	705,316	運動会Tシャツ、基礎実習I補助ほか
募集関係費補助	300,000	173,060	オープンキャンパス関連費用
卒業記念品	250,000	330,000	タイピン、ブローチ
総会・同窓会費	0	0	
名簿管理費	250,000	168,801	業者委託
学会参加費補助（学生）	150,000	134,960	20件
講演料	150,000	17,474	3名分（概論）
その他	100,000	67,640	振込手数料、謝礼、ロゴデザイン料
事務局費	210,000	69,915	
会議費	100,000	0	
会議時交通費補助	20,000	8,100	監査、役員会交通費
消耗品費	10,000	0	
アルバイト費	50,000	0	
その他	0	51,815	校友会懇親会費、各種交通費、振込手数料
慶弔費	30,000	10,000	紫友会記念式典祝儀代
予備費	8,686,372	0	
縁越金	0	9,583,900	
合計	11,396,372	11,251,066	

終身会費積立金残額報告

令和5年度まで	19,686,072	
令和5/令和6年度	102,172	積立金（-1,667,166）、利息（4,994）、年会費（1,560,000）
合計	19,583,900	三井住友銀行

以上の通り、報告いたします。 令和7年4月15日 会計担当 周防 玲

会計の収支決算は関係諸帳簿および証書類と照合の結果、正確であることを認めます。

令和7年5月8日

監事

山内剛宏

同

桜水会による学会参加補助

令和6年度は以下の学生に学会参加費を補助しました。

所属研究室	氏名	学会名	発表題目
化学	俵 わかこ	第78回日本栄養・食糧学会	骨格筋壊養細胞を用いた2型糖尿病モデルにおける中鎖脂肪酸投与による細胞内変化の解析
化学 (M2)	向井 理紗	第78回日本栄養・食糧学会	糖尿病治療薬リラグルチドが骨格筋培養細胞に与える影響鍛解構
化学 (M1)	小鳩 歩	第78回日本栄養・食糧学会	摂食タイミング同期モデルを用いた魚肉タンパク質摂餌が骨格筋肥大に与える影響の解析
病理 (M1)	菊地尚汰	AQUA2024	Efficacy of Novel Immunostimulants Against Infectious Hematopoietic Necrosis Virus (IHNV) in Rainbow Trout <i>Oncorhynchus mykiss</i>
病理 (M2)	片野珠生	AQUA2024	Prevalence of Infectious Hematopoietic Necrosis Virus (IHNV) in Seawater-cultured Rainbow Trout <i>Oncorhynchus mykiss</i> and Amago Trout <i>O. masou</i> Ishikawai in Japan
生理 (M2)	宇野加奈子	日本プランクトン学会・日本ペントス学会合同大会2024	鯨類付着性オニフジツボの系統解析
環境 (M1)	金浦主佐	日本プランクトン学会・日本ペントス学会合同大会2024	相模湾沿岸におけるマイクロ植物プランクトン群集の季節・経年変化
病理 (M1)	藤原涼輔	日本水産学会秋季大会	免疫抑制剤FTY720が魚類の末梢血リンパ球の動態に及ぼす影響
生理 (D1)	齋藤夏歩	25th Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals	In vitro Downregulation of Albumin Causes Metabolic Disorder in Dolphin Cells
利用 (M1)	古川俊	日本水産学会秋季大会	スルメイカ肉の冷凍貯蔵耐性に及ぼすミンチ加工
利用 (M1)	桑原圭司	日本水産学会秋季大会	イカ類の外套膜筋肉およびタンパク質の加熱ゲル化特性
増殖 (M1)	森村恵	日本水産学会秋季大会	フグ類の毒化に及ぼす腐肉食性巻貝類の関与
増殖 (M1)	白井愛花	日本水産学会秋季大会	カイメン <i>Jaspis</i> 属に含まれるポリペプチド化合物の探索
増殖 (M2)	白井響子	第24回マリンバイオテクノロジー学会大会	炭素・窒素安定同位体にともとづくオオツノヒラムシの生態
増殖 (M2)	木原聖人	第24回マリンバイオテクノロジー学会大会	オオツノヒラムシにおけるtetrodotoxin類の伝播様式
増殖 (M2)	木原聖人	日本水産学会秋季大会	微生物どうしの共培養における新規二次代謝産物の探索研究
生理 (M2)	山本拓実	日本水産学会春季大会	日本近海カマイルカの集團構造とその分布
生理 (M2)	高橋翔	日本水産学会春季大会	イルカ細胞の高塩分負荷時の応答に関する研究
計測 (M2)	小野俊太郎	日本水産学会春季大会	口腔内部空間の抗がりと針掛かりのしやすさ I 鈎針を口腔に入れたカサゴの行動
生理 (M2)	山崎陸真	日本水産学会春季大会	鯨類の皮下脂肪と内臓脂肪の生理学特徴に関する研究



編集後記

○昨年は桜水会会報の発刊が 10 月にずれ込み、楽しみにされていた方々にはご迷惑をおかけいたしましたが、本年度はなんとか 5 月に発刊することができました。原稿の収集が比較的スムーズにいったことと、構成・校閲も流行りの生成 AI を活用し、業務の効率化が功を奏したものと思います。昨年度で担任業務も終わり、年度はじめの慌しさも終わり、この会報も終わり、ようやく一息つける時期になりました。卒業生の皆様もご自愛ください。

○桜水会会報のデザイン変更に伴い、海洋らしい写真を募集しています。卒業生の皆様でこれと思われる写真をお持ちの方がいらっしゃいましたら、お気軽にご連絡ください。

○桜水会のホームページ(HP)を立ち上げ、学科 HP にリンクしております。桜水会の沿革・歴史、役員・事務局、各卒業期の会員数の他、桜水会会報第 24 号（平成 11 年度）以降のバックナンバーを掲載しており、ダウンロードもできますので是非ご覧ください。学科ホームページのアドレス <http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/> です。

住所変更手続について

平成 22 年 3 月 1 日より、桜水会ホームページ上から名簿（住所・勤務先等）変更届けができるようになりました。

<http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/>

○同窓会を企画されている幹事の皆様へ

個人情報保護の観点から名簿の提供は困難な状況です。対応策としまして、総会案内送付時に、幹事の方が作成された同窓会開催案内を同封する形をとらせて頂いたこともあります。必要に応じて、ご相談ください。

（編集担当 澤山英太郎）

原稿の募集

桜水会会報第 50 号の原稿を募集します。「職場便り」「近況」「クラス会」「随筆」など、800～1000 字程度にまとめ、2026 年 12 月末までに下記にお送り下さい。なお、原稿は下記の電子メール（添付ファイルの場合、Word で作成のこと）でも受け付けています。

（送付先）〒252-0880
神奈川県藤沢市亀井野 1866
日本大学生物資源科学部
海洋生物学科内
桜水会事務局 宛
E-mail:
sawayama.eitaro@nihon-u.ac.jp
(澤山)



撮影者：伊藤正晟

(2022 年度第一回フォトコンテスト 準グランプリ)

学科の活動は以下の SNS でも紹介しています！
是非、覗いてください。

Instagram



Twitter



日本大学桜水会会報 49 号

令和 7 年 5 月 発行

編集 日本大学桜水会事務局

発行 日本大学桜水会

日本大学生物資源科学部

海洋生物学科内

〒252-0880

神奈川県藤沢市龜井野 1866

電話 0466 (84) 3685

E-mail: sawayama.eitaro@nihon-u.ac.jp